

春休み少年少女名作鑑賞

少年時代から鑑賞眼を養い高めるといことは、将来の人間形成に役立つものが多分にあります。そこで、春休みの期間に少年層でも理解できるようであろう心に残る映画を選んでここに特集をつくりました。ジュニア版フィルムセンターとして、御家族ともども御利用いただきたく

ヒル（午後3時開映）			
期日	題名	製作会社・製作年	監督
3月25日(土)	手をつなぐ子等（85分）	大映 1948	稲垣浩
27日(月)	風の又三郎（97分）	日活 1940	島耕二
28日(火)	アンデルセン物語（80分）	東映動画 1968	大工原章
29日(水)	女中っ子（140分）	日活 1955	田坂具隆
30日(木)	バグダッドの盗賊(140分)(説明つき)	米・U・A 1924	ラウール・ウォルシュ

手をつなぐ子等

大映京都1948年作品

原作＝田村一二 脚色＝伊丹万作 監＝督稲垣浩 撮影＝宮川一夫 音楽＝大木正夫 出演者＝笠智衆(村松訓導) 初山たかし(中山寛太) 杉村春子(寛太の母) 香川良介(寛太の父) 徳川夢声(校長) 島村イッオ(級長奥村) 宮田二郎(山田金三) 泉田行夫(岡野訓導) 村田宏寿(校医) 常盤操子(佐藤訓導) 伊達三郎(山崎訓導) 葉山富之輔(町長) 牧竜介(坂田教頭) 9巻(2365米) 3月2日封切 ベスト・テン第2位

<かいせつ>

知恵遅れの特殊児童と教師の交流を綴った田村一二の原作もさることながら、これを脚色した伊丹万作の力量が高く評価された作品である。ややもすれば大人の目から見た子供の世界観や、単なる同情ばかりを強要するものになりがち素材を、底抜けに善良な主人公の少年が、ついには悪童を改心させたり、それまで嫌っていた学校へ通うまでの、少年と親友のやりとりなど、慎重な構成によって人間味あふれる場面を展開させ、人間愛あふれる一篇に作り上げた。演出の稲垣監督も手がたい描写で映像化し、忘れ難い佳作に仕上げている。1964年、羽仁進監督が伊丹の脚本に手を加えて再映化している。

こころの山脈

本宮方式映画製作の会1966年作品

協力製作＝近代映画協会、新藤兼人、能登節雄 脚本＝千葉茂樹 監督＝吉村公三郎 撮影＝杉田安久利 音楽＝池野成 出演者＝山岡久乃(教師本間秀代) 宇野重吉(秀代の夫久平) 殿山泰司(西川校長) 吉行和子(坂井安子先生) 奈良岡朋子(西坂貞子) 佐々木すみ江(荒井先生) 増田順司(小石教頭) 江角英明(塚田先生) 玉川伊佐男(大沢先生) 田中筆子(弘子の母) 本宮町々民 8巻(2856米) 2月2日封切 ベスト・テン第8位

<かいせつ>

福島県安達郡本宮町の本宮小学校では長年映画教育運動を続けていたが、俗悪な映画から子供たちを守ろうとしてPTAや先生が中心となって資金を集め、製作協力を独立プロの雄近代映画協会に依頼して完成させたものである。出産のため休暇をとった教師の代りに教壇に立つことになった一主婦が、戦前の教師経験しなく、長年家庭にひきこもって子供や夫の面倒を見てきて急にいたずら盛りを生徒の前に立った時、彼女の戸惑いは並大抵なものではなかった。一人の不遇な少年との出会いが周囲の誤解を浴びながらも、少年がたち走りつくとともに女教師の教育者としてのあり方が人々から認められていく過程が、吉村監督の堅実な演出で描かれていく。

風の又三郎

日活多摩川1940年作品

原作＝宮沢賢治 脚色＝永見隆二 小池慎太郎 監督＝島耕二 撮影＝相坂操一 出演者＝片山明彦(三郎) 中田弘二(先生) 風見章子(嘉助の姉) 北竜二(三郎の父) 西島梯二郎(一郎の兄) 大泉滉(一郎) 星野和正(嘉助) 小泉忠(耕助) 中島利夫(佐太郎) 10巻(2651米) 10月10日封切 ベスト・テン第3位

<かいせつ>

《銀河鉄道の夜》と並ぶ宮沢賢治の有名な童話を映画化した作品で、ある日東北の僻村の小学校に北海道から転校してきた不思議な少年が、いくつかの“奇跡”をまきおこし、村の悪童たちが次第に彼に一目おくようになり、ある日忽然と風のように去って行くまでの日常生活を、幻想味あふれる方法で描いた島監督の代表的作品である。島耕二は2枚目俳優から監督に転向したばかりの頃で、この一作で一躍名をあげた。抒情的作品にその本領を發揮したが、戦後は多彩な作品を次々に発表して大映の黄金時代を作った1人でもあった。名子役振りを發揮した片山明彦は島監督の長男である。

いと存じます。

上映は午後3時と6時15分の2回。先着順にて定員239名に達し次第入場を締め切ります。(開館は12時30分。)ヒル・ヨル全館入替え制。一般200円・学生140円・小人100円

フィルムセンター

ヨ ル（午後6時15分開映）			
期日	題名	製作会社・製作年	監督
3月25日(土)	こころの山脈（104分）	本宮方式映画製作の会 1966	吉村公三郎
27日(月)	次郎物語（97分）	新東宝 1955	清水宏
28日(火)	裸の大将（92分）	東宝 1958	堀川弘通
29日(水)	キクとイサム（117分）	大東映画 1959	今井正
30日(木)	奇傑ゾロ（95分）(説明つき)	米・U・A 1920	フレド・ニプロ

父泰平 轟夕起子(勝美の母梅子) 東山千栄子(初の母) 高田敏江(野村ひろ子) 細川ちか子(野呂夫人) 矢野錠(若月) 宮崎準(仁村先生) 高品格(列車の車掌) 北村谷栄(雑貨屋の老婆) 14巻(3900米) 6月26日封切 ベスト・テン第7位

<かいせつ>

今では呼ばれることの少なくなつたくねえや」とかく女中」という言葉が、まだ広く使われていた時代であり、そういうお手伝いさんが家族とともに起居を共にし、家族と密接な関係にあった頃の話である。秋田から上京した娘が富裕な家の女中として住みこみ、その一家で一番変わった性格のため母親の愛情すら拒否されている少年が、次第に純真素朴な娘の愛にひかれて心を開いていくまでを、田坂監督が誠実味あふれる心で描いた作品であり、戦後スランプ状態にあった同監督がようやくその本領を發揮した佳作である。由起しげ子の原作は先年、人気歌手森昌子の主演で「どんぐりっ子」として再映画化されている。

キクとイサム

大東映画1959年作品

脚本＝水木洋子 監督＝今井正 撮影＝中尾駿一郎 音楽＝大木正夫 出演者＝高橋エミ子(川田キク) 奥の山ジョージ(川田イサム) 北村谷栄(祖母川田しげ子) 宮口精二(院長さん) 東野英治郎(巡査) 織田政雄(小賀素先生) 荒木道子(杉田先生) 長岡輝子(尼さん) 三島雅夫(座長) 三国連太郎(新聞記者) 中村是好(兎吉) 殿山泰司(組合の人) 多々良純(呼び込みの男) 三井弘次(雑貨屋) 岸輝子(おかみ) 13巻(3201米) 3月29日封切 ベスト・テン第1位

<かいせつ>

戦後日本の大きな問題として、占領米軍人との間に生まれた“混血児”の存在があった。特に10数年を経た時点では、彼らにとって進学や就職問題がさしあたったの難題であり、それ以上に人間形成期における一番苦悶な時を迎え、理不尽な差別観におおわれた彼らの状況は並大抵なものではなかった。そういった社会問題に題材を求めた水木洋子の透徹した眼で見つめた脚本と、情に溺れることなく真つ向うから取り組んだ社会派監督今井正の演出で完成された名作である。主演の姉弟を演じた2人はこの映画で抜擢されたものであり、2人の親代りの老婆を演じた北村谷栄は自分より二まわりも年上の老け役を熱演、ユーモラスなやりとりの中で痛烈に日本人全体の責任の重さを問にかけている。

バグダッドの盗賊

The Thief of Bagdad

アメリカ＝ユナイテッド・アーチストズ 1924年作品

原案＝エルトン・トーマス 脚色＝ロッタ・ウッツ 監督＝ラウール・ウォルシュ 撮影＝アーサー・エドソン 美術＝ウィリアム・キムロン・メンジース 衣裳＝ミッチェル・ライゼン 出演者＝ダグラス・フェアバンクス(バグダッドの盗賊アーメド) ジュラン・ジョンストン(王妃) スニッツ・エドワーズ(アーメドの相棒) チャールズ・ベルチャー(聖者) アンナ・メイ・ウォン(モングルの侍女) ウィンター・ブロッソン(ルートを弾く奴隷) エッタ・リー(サント・ボードの奴隷) ブランドン・ハースト(バグダッド王) 上山草人(モングルの王子) 南部邦彦(その侍従) 定吉・ハートマン(その魔術師) ノーブル・ジョンソン(インドの王子) マシルド・コモント(ベルジャの王子) 無声14巻 日本公開1925年1月7日・帝国館 武蔵野館 ベスト・テン第1位

<かいせつ>

アメリカが生んだサイレント映画のスター、ダグラス・フェアバンクス(1883～1939)は文字で表現したり口で伝えることのできないほどすばらしい個性と魅力をスクリーン一杯にみまがらせていたといわれている。このダグラスが惹きこんでくれる限らない夢と冒険の世界の楽しさは映画の面白さの一つだが、

トの舞台として有名なバグダッドの荘麗な街と宮殿、奇怪な城門、美しいお姫さま、空飛ぶ絨緞と千里眼の水晶球、空駆ける天馬と魔法の小箱。そこへ底抜けに陽気な若者の盗賊がやってきてお姫さまに恋し、その邪魔をしようとする悪人どもを退治してめでたく結婚する波瀾万丈のお話は、《千夜一夜物語》にはない物語で、ダグラス(エルトン・トーマスは彼のペンネーム)の創作になるもの。

ダグラスの相手役のお姫さまに扮したジュラン・ジョンストンは、1923年から映画に出、演ずるようになりこれが4作目の新人女優で、このあと『南海のアロマ』(1926)、『恋せよ乙女』(1927)などに出ており、モングルの侍女を演じたアンナ・メイ・ウォン(1907～61)は中国系女優ですでに『恋の睡蓮』(1922)というカラーによる東洋劇に出演しているほか、このあとも『上海特急』(1932)や『朱金昭』(1934)といった東洋趣味の作品に出ていた。またモングルの王子に扮した上山草人は、当時ハリウッドに渡って職探しをしていた日本の新劇俳優で、この作品での成功によりこのあとも『腕自慢』(1928)や『海の野獣』(1926)など数多くのアメリカ映画に出演している。

奇傑ゾロ

The Mark of Zorro

アメリカ＝ユナイテッド・アーチストズ 1920年作品

原作＝ジョンストン・マッカリー 脚色＝ユージン・マリン、ダグラス・フェアバンクス 撮影＝ウィリアム・マクガン、ハリ・ソープ 出演者＝ダグラス・フェアバンクス(ドン・ディエゴ・ベガ、奇傑ゾロ) マルグリート・ド・ラ・モット(ロリータ) ノア・ピアリ(ペドロ軍曹) ロバート・マッキム(ファン・ラモン大尉) チャールズ・ヒル・メイルズ(ドン・カルロス・ブリード) クレア・マクドウェル(ドンナ・カタリーナ) シドニー・ドグリー(ドン・アレハンドロ) ジョージ・ベリオラット(総督アレバラー) ウォルト・ホイトマン(神父フレイ・フェリエ) 無声8巻 日本公開1921年11月2日 電気館

<かいせつ>

世界中のファンから〈ダグ〉の愛称で親しまれた住年のスケーター、ダグラス・フェアバンクスが、開拓けで弱虫な名門の放蕩息子と一変して神出鬼没の義賊ゾロの二役を演じわけてスクリーンも狭しと活躍し、アクション映画の面白さを楽しませてくれる娯楽映画。

今から150年ほど前、スペインの伝道師がカリフォルニアの地に布教をしていた頃のこと、ゾロと名乗る盗賊が土地の大金持やスペインの高官の家に盗みに入っては盗んだ品を貧しい人たちに与えていた。この盗賊こそ誰だろうスペインの貴族ヴェガ家の放蕩息子と世の嘲笑を一身に受けていたドン・ディエゴであった。ゾロは悪戯らしく悪知事一味を改心させ、悪知事の片腕ラモン大尉に窮地に陥し入れられた名家の娘ロリータを救って彼女の愛を手に入れるのだったという物語は、《オール・ストーリー・ウィークリー》に掲載されたジョンストン・マッカリーの小説《カピストラーノの呪》を『愛着の路』(1922)や『東は東、西は西』(1925)などの脚本を書いているユージン・マリンの協力をえてダグラスが脚色したもの。

ダグラスの相手役ロリータに扮したマルグリート・ド・ラ・モット(1903～50)は、すでに『アリゾナ』(1918)でもダグラスと共演しており、このあとも『ナット』『三銃士』(1921)、『鉄仮面』(1929)といったダグラス作品に出演している。演出に当たったフレド・ニプロ監督(1874～1948)は、1918年の『結婚の指環』から監督として活動を開始し、このあと『三銃士』のほか、ヴァレンタイン主演の『血と砂』(1922)、ラン・ノヴァロ主演の『ビレニーの情火』『紅百合』(1924)と『ベン・ハー』(1925)、グレタ・ガルボ主演の『明眸罪あり』(1926)、『女の秘密』(1928)といった大スターの主演映画を撮っている。